

ヴィクトリア朝社会の代弁者としてのテニスン

— *In Memoriam* 出版の苦悩を経て得た賞賛 —

神 保 明 香

序

『インメモリアム』(*In Memoriam*)はアルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson)が最愛の友であったアーサー・ヘンリー・ハラム(Arthur Henry Hallam)の死に対する悲しみを十年以上もの歳月をかけて書き綴ったテニスンの代表作である。この作品が発表された1850年はヴィクトリア朝の最盛期だったが、この年はテニスンにとっても大変重要な意味を持つ年となった。この年の五月末には『インメモリアム』が公刊され好評を博し、詩人としての地位を確立し、その数週間後には十数年の婚約期間を経てエミリー・セルウッド(Emily Sellwood)との結婚を果たした。さらに十一月にはウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth)の後任として桂冠詩人に任命されるという、まさにテニスンにとっては「驚異の年」(*Annus Mirabilis*)となった。

『インメモリアム』によってテニスンは一躍有名となり、ヴィクトリア朝を代表する詩人と称されるようになったが、この作品が当時の人々に称美されたのはどのような理由があるのだろうか。その問いを明らかにするために、まず『インメモリアム』出版に関する事実に関して述べていきたい。テニスンの詩人としての人生を大きく変える転機となったこの作品だが、彼は当初出版に対して消極的な態度を示していた。そこではじめに、出版に対する彼の意識の変化を追い、彼が出版を決意した理由を明らかにしていく。

さらに、出版後に『インメモリアム』が得た社会からの大きな反響について考察を進めていきたい。この作品の評価はおおむね高く、テニスンを高評した人々の中には、華々しいこの時代を象徴するヴィクトリア女王の姿もあった。そこで、彼女のテニスンに対する評価が民衆に与えた影響を考え、またヴィクトリア朝という時代の持つ陰と陽の両面から、当時の人々にとって『インメモリアム』が果たした役割について考察していくことにする。

1. 『インメモリアム』出版へのテニスンの決意

『インメモリアム』は、テニスンの代表作として知られているが、実のところ、彼自身はこの作品を出版するつもりは始めからなかったのである。では、何故この作品が出版されることになったのかという疑問が湧いてくるが、その課程を丁寧に追っていくと、テニスンにとってこの詩が特別な作品であったことがよくわかる。

テニスン自身がそう述べているように、そもそも『インメモリアム』は友人ハラムの死に対する、抑えきれない悲しみを十年以上も記し続けた結果出来上がった一種の日記のようなものであった。テニスンのハラムへの想いは、単なる友人関係以上のものがあったことも明らかであり、テニスンの頭の中には、個人的な日記を出版するという考えはそもそもなかったのである。そのような考えでいたテニスンに出版を勧めたのが、出版社モクソン社（Moxon）だった。はじめは出版に消極的な態度を示していたテニスンが、最終的に出版を承諾した理由は、大きく分けて以下の三つの点から説明出来る。

まず、一つは前作の『王女』（*The Princess*）の売り上げが1850年になる前に好調に転じたことだ。この作品は1847年に出版された当初、酷評を受け、詩人に自信を喪失させることになったのだが、翌年になってから販売数が伸び始め、初版の2,000部が完売し第二版が出版される運びとなった。2,000部は彼のそれまでの作品と比べて飛躍的な販売数であり、この数字がテニスンにとって大きな自信となったことは言うまでもない。そしてその後も順調に販売数を伸ばし、1849年には改訂された第三版が出版され、1850年になっても尚、売り上げは順調だった。

次に挙げられるのが、テニスンから原稿を得たモクソン社が『インメモリアム』の出版を強く希望したのが同じ1850年であったことだ。さらにモクソン社は出版に先立ってテニスンに300ポンドの支払いを申し出ている。テニスンの息子ハラム（Hallam Tennyson）が後に証言している話では、モクソン社はさらに、『インメモリアム』が出版されれば毎年の印税収入をテニスンに支払うことを約束していたようである。当時はまだ経済的に困窮した暮らし向きで、しかし一方でエミリーとの結婚を早く実現させたかったテニスンは、このモクソン社の熱心な申し出に心を動かされながらも、それでもまだ出版を決意出来ずにいたのである。

最終的にテニスンに出版を決意させた最も大きな要因は、エミリーとの結婚であった。それは、詩人が十年以上も望み続けたことであり、エミリーは、ハラムの死後テニスンが心を開いた最初で最後の人物だった。テニスンがエミリーと婚約したのは1840年のことである。テニスンの希望とは裏腹に、長い婚約期間を経てエミリーはテニスンとの結婚に踏み出せずにいたのだった。テニスンが詩人として生計を立てていけるほどの収入がなく、経済的に結婚生活を送ることが困難であったことはもちろん、エミリーの父親が問題の中心だった。テニスンの孫は、その点について伝記にこう記している。「エミリーの父親は厳格な聖職者であった。よって、テニスンの放浪者のような生活ぶりや、酒やタバコを好む態度、また宗教に対する自由な解釈を受け入れることが出来なかったのだ」（Charles Tennyson 179）。つまり、テニスンとエミリーの結婚の最も大きな障害は彼女の父親の反対だったのである。

そのような状況の中、婚約してからもテニスンの経済状況は変わらず、エミリーの父親との軋轢を埋めることは容易にかなわなかった。よって、婚約はしたものの、彼らはすぐに結婚することが出来ずに、離れて生活することになって十年が経過していた。この長い離別生活を経て、二人の意識をもう一度結婚へ向けるきっかけになったのが、この『インメモリアム』だったのである。テニスンと離

れてから、彼と疎遠になっていたエミリーだったが、1850年四月初め『インメモリアム』のコピーを手にするようになる。それは、出版の前にテニスが親しい友人だけに渡したコピーだったのだが、テニスの友人であったハードウィック・ドラモンド・ラウンズレー (Rev. Hardwicke Drummond Rawnsley) が所有していたものを、彼の妻でエミリーのいとこのキャサリン (Catherine) が、エミリーに読ませるために彼女の机の上に置いたのである。このキャサリンはかねてからエミリーとテニスの結婚を望んでおり、彼女の計らい通りエミリーはテニスの詩を読み、感動したとキャサリンに手紙で伝えている。エミリーが『インメモリアム』を読んでからわずか二ヵ月後に二人は結婚しており、この一件がエミリーにテニスとの結婚を決意させたひとつのきっかけになったと考えられる。エミリーがテニスとの結婚を今一度考えたころ、テニス自身も『インメモリアム』の出版によって得られる収入が、エミリーとの結婚を実現させるためには必要であると考えようになり、しぶっていた出版に遂に同意したのだった。

2. 詩の市場の縮小と『インメモリアム』への賞賛

テニスも『インメモリアム』を出版する前までは、経済的に苦しい生活をしていただが、19世紀の初めには英国社会の中で詩の市場が縮小しているという現実があった。当時、開発されたステロ版印刷機と製紙業の機械化は、出版業と読者へ多大な影響を与えた。これらの発明によってそれまで手作業で行っていた出版までの作業は機械化され、費用と時間の無駄が削減されるようになった。それは、結果として、これまで一部の作品に限られていた本の出版の機会が多くの作品に広がる助けとなった。そのような状況下で、発行部数を伸ばしたのが新聞や定期刊行物であり、その一方でこれらの飛躍的な売れ行きが、詩の売り上げを落ち込ませる要因となった。定期刊行物などの出版物は、主に安価で内容も多岐に渡っていた。多くはその内容に詩も含んでおり、定期刊行物を手に入れば、詩を読むだけでなく、さらに別の読み物や情報も手に入れることが可能になり、しかもそれまで主流だった詩集よりも安いことは、読者の要望に適っていた。詩集の出版の減少について記された、以下のような資料がある。1820年に発行された詩集は320冊以上発行あり、そのうち200冊以上が新規出版されていたが、六年後の1826年には127冊が出版され、新規は91冊に減り、さらに六年後の1832年になると出版されたのは110冊、新規は77冊と、わずか十二年のうちに出版部数も新規出版も約三分の一に減少していることがわかる。

時を同じくして、*Annuals* のような年に一度発行される本も流行していた。短編小説や散文などさまざまな読み物を含んだこれらの本は、クリスマスなどに子供や女性への贈り物として人気を博した。そして、*Annuals* が登場する前に贈り物として重宝されていたのが、詩集であったのである。*Annuals* にその役割を取って代わられた詩集は、市場での需要がさらに落ち込んでいった。需要の落ち込みに従って、出版社も詩集の出版に消極的になり、新たな詩集を出版する会社はほとんどみられなくなった。時と共に状況はさらに深刻になり、遂には出版社が著者の詩人たちに出版にかかる費用を共に負担するように頼むようになった。

このように市場における詩人たちの立場が追い込まれる中で、1830年から40年代には純粋な詩集を出版する出版社はモクソン社だけになってしまった。このモクソン社からテニスンも『インメモリアム』を出版したのだが、彼も初版5,000部の出版費用を自ら支払っている。テニスはモクソン社との契約で、自らが初期投資をすることで、仮に詩集が売れた場合には自分の収益が保障されるように交渉したのだった。失敗すれば大きな代償を払うことになるような契約をしたテニスンの行動は、彼が出版を決意した後、作品に対して少しずつ自信を持ち始めていったことの表れだと考えることが出来るだろう。

不安と期待の中、出版を決めたテニスンの想いに応えるように、『インメモリアム』の売れ行きは大方の予想をはるかに超えるものとなった。出版されるやいなや順調に売り上げを伸ばし、初版5,000部が出版から数週間で売り切れとなった。その後も第二版、第三版と出版され、最終的には数ヶ月でなんと60,000部もの発行部数となったという記述が残っている。『インメモリアム』の約二十年前、1932年に出版され、酷評を受けた彼の詩集『1832年詩集』(*Poems*)が初版として600部出版されたが、売れ行きが芳しくなく、多くの損失を出したという事実と比較しても、この『インメモリアム』が驚異的な売れ行きだったことは明らかである。『リーダー』(*The Leader*)や『エグザミナー』(*The Examiner*)などに、出版の直後に書かれた書評でも『インメモリアム』は高く評価された。『リーダー』の中で、ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lews) は『リシダス』(*Lycidas*)よりも『インメモリアム』をすぐれた詩として賞賛している。一般的に『インメモリアム』、『リシダス』、『アドネイス』(*Adonais*)は英国の三大挽歌と呼ばれるが、カミング (J. Cuming) も “If they [Milton and Shelley] have a defect it is that their very excellence and symmetry remind us more of the sculptor-poet than of the mourner. In this respect Tennyson excels his masters” (103) と述べ、技巧的には優れたミルトンとシェリーの挽歌よりも、読み手に深い悲しみを共感させる『インメモリアム』が、三者のなかで最もすぐれた挽歌だと評価している。

この他にも、インメモリアムを評価した書評にエリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning) によるものがある。彼女は『インメモリアム』をヴィクトリア朝の時代の中で最も優れた長編詩であるとしながら、一方でこの作品がこれほどまでに一般大衆の間で好評を博したことに驚きを示している。

The poem [*In Memoriam*] which does not assert or even imply, any of the main doctrines of the Christian faith … was attacked by some as definitely un-Christian, and the monotony in form and subject and the lack of obvious continuity, due to the desultory way in which it had been composed, might have been expected to prove uncongenial to the public. (Charles Tennyson 248)

さらに彼女の指摘はこの作品の最終部にも及ぶ。最終部はテニスンの妹セシリア (Cecilia) と友人エ

ドマンド・ラシントン（Edmund Lushington）との結婚を題材に、大切な人を失った喪失感を埋めるのは新たな愛で、その愛が絶望から希望へと人を導くということを示したエピローグだが、この部分がいかに「曖昧」でまた「抽象的」であると述べている。ブラウニングが指摘するように、このエピローグが「曖昧」で「抽象的」であると考えれば、実は『インメモリアム』という作品全体もその「曖昧」さを包含していると考えることが出来そうだ。つまり、『インメモリアム』には単にハラムの死を嘆くテニスンの個人的な叫びではなく、愛する人の死に直面した人間の悲しみと、その嘆きの先にある希望が一般的な事柄として書き出されているということである。トマス・スターンズ・エリオット（Thomas Stearns Eliot）は『インメモリアム』を簡素な言葉と、特定の場所に結びついた普遍的な感情を持った、偉大な詩だと評価している。

[T]he poem [*In Memoriam*] has to be comprehended as a whole. We may not memorize a few passages, we cannot find a 'fair sample'; we have to comprehend the whole of a poem which is essentially the length that it is. (T. S. Eliot 182)

彼はまた、『インメモリアム』にはテニスン自身の感情だけではなく、彼の生きる時代の感情も表れていると指摘している。実際、テニスンの同時代の人たちは『インメモリアム』を読んで、この作品を当時薄れつつあったキリスト教信仰に対する希望と励ましであると受け取ったようだが、この詩を彼らが受け入れ賞賛した理由を考えるためには、ここでヴィクトリア朝社会が包含していた時代の雰囲気や社会状況について考察する必要があるだろう。

3. ヴィクトリア朝の光と影

ヴィクトリア女王がその象徴的存在であった輝かしい時代としてヴィクトリア朝は認識されるが、この時代、英国では大きく分けて三つの階級、貴族階級、中産階級、そして労働者階級に人々は分類された。とりわけ、産業革命によって得た富と、選挙法の改正によって得た政治的な影響力によって台頭した中産階級の力はすさまじかった。中産階級の間で、男は外で働き女性は家庭を守るという男女の住み分けが確立したのもこの時代である。一方、政府の無干渉主義によって繁栄した資本主義経済は人々の階級差を明確にし、また当時中心的であった自由主義の精神は人々が自分勝手に活動することを咎めず、結果として英国には後に「俗物根性」と揶揄されるような意識が広がっていった。マシュー・アーノルド（Matthew Arnold）はこの「俗物根性」に警笛を鳴らし『教養と無秩序』（*Culture and Anarchy*）のなかで、人々の間で無秩序状態が広まりつつあることを危惧した。彼はこの無秩序な状況を打開するためには「教養」が必要であり、別の言葉で言えば優美と英知の完全な状態を追求することだと主張したのである。

中産階級が社会的に力を持つようになった輝かしいヴィクトリア朝社会の裏側で、英国の都市にはスラムと呼ばれる貧民街の存在があったことも忘れてはならない。ロンドンはその典型であり、

そこには資本主義経済によって社会から押し出されたおびただしい数の労働者階級の人々が暮らしていた。1844年に書かれた労働者階級の現状によると、悪臭がたちこめる狭い地域にたくさんの方が暮らすスラムの様子が惨憺たるものであったことがはっきりと記されている⁽¹⁾。グスタブ・ドレ（Gustave Doré）の描いたロンドンの街には人でごったがえしたスラムの様子が見て取れるし（図1）、また橋の下で夜を明かす人たちの姿も見られる（図2）。ドレと共に旅をしていたブランシャール・ジェロルド（Blanchard Jerrold）はこの絵に付して「私たちは夜の丑満時に歩き回り、橋の石の欄干の陰で冷たい東風から身を守っている家のない男、女、子供たちの群れに注目した。冷たい東風は哀しげなうめき声をあげながら、テムズ河に沿って立ち並ぶ黒い船の帆柱の間を吹き抜けていた」と書いている⁽²⁾。



図1 Gustave Doré. *Ludgate Hill—A Block in the Street*. This is from Blanchard Jerrold. *London: A Pilgrimage*, p. 135.

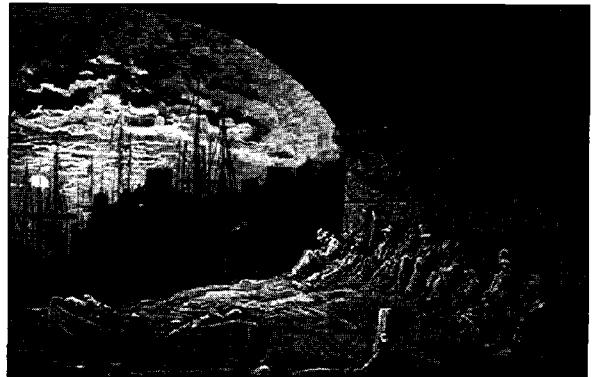


図2 Gustave Doré. *Under the Arches*. *Ibid.*, p. 219.

スラム街が示すように、ヴィクトリア朝が抱えていた負の側面も忘れてはならないが、当時の経済や社会を先導していた中産階級が果たした役割はやはり大きい。テニスンの作品にはヴィクトリア朝社会の中産階級の生活を想起させる箇所がいくつもある。例えば『王女』の一説に、「男性は外で働き、女性は家庭を守る。さもなければ混乱が生じる。」という、ヴィクトリア朝の男女のそれぞれの役割について書かれた有名な一節があるが、1864年に出版された詩集に収められた「イノックアーデン」(‘Enoch Arden’)にもまさにヴィクトリア朝らしい男性と女性が描かれている。幼いころから友人だったイノック（Enoch）とフィリップ（Philip）の二人が、やはり幼馴染のアニー（Annie）に恋

をし、船乗りになったイノックがアニーと結婚するというストーリー展開である。イノックが妻子を残して航海へ出る意志をアニーに告げた場面に以下のような一節がある。

Then first since Enoch's golden ring had girt
 Her finger, Annie fought against his will:
 Yet not with brawling opposition she,
 But manifold entreaties, many a tear,
 Many a sad kiss by day by night renewed
 (Sure that all evil would come out of it)
 Besought him, supplicating, if he cared
 For her or his dear children, not to go.
 He not for his own self caring but her,
 Her and her children, let her plead in vain;
 So grieving held his will, and bore it through. ('Enoch Arden' 157-167)

結婚してから、一度たりとも夫に反抗することがなかったアニーの従順さは、いかにもヴィクトリア朝の女性らしい。また、妻子のことを愛しながら、家族の幸福のために家をでて困難な旅に立ち向かっていくイノックの姿も、力強く男性的であり、この時代の男性像と重なる。

さらに、『インメモリアム』にもヴィクトリア朝の中産階級の夫婦のあり方、そして特に夫を失った妻へ向けた言葉と捉えられる一節がある。

These two [partners]—they dwelt with eye on eye,
 Their hearts of old have beat in tune,
 Their meetings made December June,
 Their every parting was to die.

Their love has never past away;
 The days she never can forget
 Are earnest that he loves her yet,
 Whate'er the faithless people say.

.....
 For him she plays, to him she sings
 Of early faith and plighted vows;
 She knows but matters of the house,

And he, he knows a thousand things.

Her faith is fixt and cannot move,

She darkly feels him great and wise,

She dwells on him with faithful eyes,

'I cannot understand: I love.' (In Memoriam XCVII 9-16, 29-36)

妻にとって夫の愛は永遠であり、それは夫が離れた場所へ行ってしまった後も変わらないとテニスンは説く。当時クリミア戦争によって、戦地へ旅立った夫の帰りを待つ女性たちが大勢おり、夫が帰らぬ人となる場合も少なくなかった。彼女たちにとってはテニスンの言葉が慰めとなったと考えられる。そして、そのような夫を失った女性の一人だったのがヴィクトリア女王だった。

ヴィクトリア女王は輝かしいヴィクトリア朝を象徴する人物であるが、彼女は1861年12月夫のアルバート殿下をチフスによって亡くしている。アルバートの突然の死は計り知れない衝撃と絶望感を女王に与え、悲しみに暮れた女王は長い間公の場に姿を現さなくなった。そんなときに、女王の悲嘆をやわらげる助けとなったのがテニスンの『インメモリアム』だったのだ。女王はテニスンに会ったことを、以下のように日記に綴っている。

I went down to see Tennyson ... I told him how much I admired his glorious lines to my precious Albert, and how much comfort I found in his In Memoriam. He was full of unbounded appreciation of beloved Albert. When he spoke of my own loss, of that to the nation, his eyes quite filled with tears. (Letters and Journals, 14 April 1862)

ヴィクトリア女王とアルバート殿下の家庭は、ヴィクトリア朝のシンボルともいえる存在で、中産階級からの支持も厚かった。二人の姿はしばしば絵画の題材とされ、男性的なたくましさを持つ皇太子と夫を支える慎ましい妻として女王が描かれるのが常であった。エドウィン・ランドシア（Edwin Landseer）の *Windsor Castle in Modern Times*. (図3) では、狩りから帰ってきたアルバートに寄り添うヴィクトリア女王が描かれている。どっしりと腰を下ろしたアルバートののがっしりとした体軀は力強い男性らしく、隣で真っ白な衣装を身に纏い微笑むヴィクトリアのか弱さが引き立つ。彼女は



図3 Edwin Landseer. *Windsor Castle in Modern Times*. 1841-45. Collection of Her Majesty the Queen.

まるで天使のようだ。画面の左には忠誠心を象徴する犬が描かれ、ヴィクトリアは権威ある女王としてではなく夫に従順な妻として描かれている。このような絵画を目にした中産階級の人たちが社会のトップに君臨する理想の夫婦と自分達を重ね合わせ、このような家庭を築きたいと考えたことは想像に難くない。ヴィクトリア女王が当時中産階級の間で支持されていたことを考えると、彼女が『インメモリアム』を賞賛したことは、テニスの社会的名声をさらに高める働きをしたと考えられる。

結論

18世紀後半から19世紀にかけては科学の分野で革命的に新発見が起こり、それまで人々が共有していた「自由意志」や創造主としての神の存在という意識に激しい揺さぶりをかけることになった。物質的な進歩はもちろん生産性を高め、資本主義経済によって確かに社会は豊かになったのだが、一方で精神的な支えとしてあったキリスト教の世界観が社会の中で崩れかけていることに対する不安もたしかに人々の心を捉えていた。世界が物質的に進歩してもこの世の真理を証明することは出来ず、進歩は人の死に対する不安や悲しみを取り除いてくれるものではなかった。すなわち物質的進歩もたらす精神的不安は、繁栄に酔うヴィクトリア朝社会の病理であった。そのような時に、テニスは『インメモリアム』においてハラムの死に対する彼個人の悲哀を極めて普遍的な感情として描き、人々に悲哀とどう向き合えばよいのかを考えるひとつの指標を示した。

One writes, that 'Other friends remain,'
 That 'Loss is common to the race' —
 And common is the commonplace,
 And vacant chaff well meant for grain.

That loss is common would not make
 My own less bitter, rather more:
 Too common! Never morning wore
 To evening, but some heart did break. (*In Memoriam* VI 1-8)

この詩行には、テニスの個人的なハラムへの思いでありながら、同時に人の死への悲嘆に関する普遍的な考えが表出されている。愛する者を亡くした喪失感に悩む者がテニスの言葉に自分を重ね合わせ、共感できたのも、このような詩行の持つ力による。また、プロローグでは神に対する意識をこのように表現している。

Strong Son of God, immortal Love
 Whom we, that have not seen thy face,

By faith, and faith alone, embrace,
Believing where we cannot prove. (*In Memoriam* Prologue 1-4)

ここに描かれているのも、神の存在場所を確信することが出来ない不安な想いと、逆にひたすらに神への信仰を持ち続けようとする人間存在の相反する有り様である。テニスンが不安を感じながら、キリスト教への信仰によって希望を見出したように、『インメモリアム』を読んだ者も、不安から救われるためには神への信仰心を捨ててはならないと考えることが出来たのだ。その考えは、多くの人に薄れかけていたキリスト教信仰を今一度精神の支えとするように意識を向けさせた。このように『インメモリアム』は普遍的な詩行という特質を持っていたからこそヴィクトリア朝の人々の支持を受け、それによってテニスンも社会的な名声を得たのだと考えられる。

本稿は早稲田大学文学部英文学会・教育学部英語英文学会 2008 年度合同大会 (2008 年 11 月 29 日、於・早稲田大学) での発表原稿に加筆・修正を加えたものである。

また、テニスンの詩の引用はすべて、Tennyson, Alfred Tennyson. *The Poems of Tennyson: In Three Volumes*. Ed. Christopher B. Ricks. 2nd ed., incorporating the Trinity College manuscripts. ed. Harlow, Essex: Longman, 1987. に拠る。

注(1) 1844 年の状況については、Engels, Friedrich. *The Condition of the Working-Class in England in 1844: With a Preface Written in 1892*. London: G. Allen & Unwin, 1943. を参照した。

(2) ジェロルドの言葉は、小池滋編著「ドレ画ヴィクトリア朝時代のロンドン」社会思想社。198 頁、日本語訳を参照した。

Works Cited

- Eliot, T. S. *Essays, Ancient & Modern*. London: Faber and Faber, 1936.
- Jerrold, Blanchard, and Gustave Doré illus. *London: A Pilgrimage*. Ed. Blanchard Jerrold. London: Anthem, 2005.
- Tennyson, Alfred Tennyson. *The Poems of Tennyson: In Three Volumes*. Ed. Christopher B. Ricks. 2nd ed., incorporating the Trinity College manuscripts. ed. Harlow, Essex: Longman, 1987.
- Tennyson, Charles. *Alfred Tennyson*. London: Macmillan Co., 1949.
- Victoria. *Queen Victoria in Her Letters and Journals: A Selection*. Ed. Christopher Hibbert. 1st American ed. ed. New York, N.Y., U.S.A.: Viking, 1985.
- Walters, John Cuming. *Tennyson: Poet, Philosopher, Idealist: Studies of the Life, Work, and Teaching of the Poet Laureate*. London: K. Paul, Trench, Trubner & Co., 1893.